

であった。

新宿付近はどちらかといえば消費地帯であり、生産地帯ではないが、区内にも各種の工場が設立された。

民間企業として石けん(牛込)、鉛筆(四谷)の発祥地である。また四谷では岩井、村井、両商会が煙草の製造を行った。もともと民営の煙草製造販売は、明治三十七年に日露戦争の軍費調達で官営となり、現在の西新宿の区立中央公園あたり、東京地方専売局淀橋工場が明治四十三年に創業した。

近代化を急ぐ政府は、ついで、朝鮮をめぐって清国(現中国)との戦争に突入する。

この明治二十七、二十八年の日清戦争によってもたらされた好景気でアブク銭を得て、遊興に走る人も多かった。

それにより神楽坂を始め、花柳界が賑わった。

では、その頃の新宿駅の付近はどうかというと、駅から四谷、大木戸までは町とはいえ、江戸時代の面影そのままに、商家もしょんぼりした板屋根や、草ぶき屋根のみすぼらしい家もあり、その上、表通りには空き地が点在していた。

一歩裏に入れば北は大久保から早稲田あたりまで、藪沢あり、田圃あり、昼なお暗き森もあって、人影もないという有様であった。

新宿区内の農業は蔬菜類が半分以上も占めており、米作は少ない。柏木、大久保、落合などの諸村が畑作農業の重要部分を占めていた。

日清戦争を経て、資本主義の発達とともに東京市はますます拡大発展を遂げるが、同時に隣接する地域の田畑が市街地化される過程でもあった。

大久保町は大正三年に新宿から万世橋に通じる市電の開通により、西向天神下の水田が埋め立てられ、全町の田畑は宅地化するのが頻繁になり、農業に従事する者が少なくなっていた。

東京の発展にともなって、各種企業の興隆からサラリーマンたちの住宅地となっていく。そして日露戦争を境に農村の宅地化が急増する。それにより農民の転職として、農植木職と称して庭作り、または種樹の培養をする者が多かった。



## ■関東大震災後の新宿の発展

大正十二年九月一日に襲った関東大震災での新宿一帯の被害は、下町に比べてゼロといってよい。

家屋の全壊はあっても、火災をまぬがれたのは幸運であった。

震災後、山手銀座の名を神楽坂から奪った新宿ではあるが、潮のごとく押し寄せる群衆、関門となる新宿駅、キネマ、デパート、カフェ、喫茶店、混雑する狭い道路、これらのものを除いたら新宿は消滅する。しかし淀橋町として西北一帯の住宅地区は残るが、この町の中心となるものは、やはり歓楽境新宿である。

旧三越であった二幸、武蔵野館、新歌舞伎座、三越、これらのカフェ街、食堂街等が盛んであった。

新宿駅の乗降客は日に二十万以上、東京駅よりも多く日本一であり、これを中心として放射線状に交通網がのびていった。大久保駅は町中ではないが、北部地方にとつては便利な駅であった。

大久保といえはつじを忘れることはできない。江戸時代百人組の諸氏が勤務の傍ら培養したのが始まりである。